

中野拓哉作 「トップ」

< 前編 >

- (効果音) (授業終了のチャイム。教室のガヤ)
- 先生 それでは、この間行われた実力テストの結果が出たので、名前の順に返すから取りに來い。
- 口々に 「え、ウッソー。」「もうかよ。」など。
- 先生 新井。(はい)飯田。(はい)井上(はい)...
- 女子 ねえねえ、小野寺君がまたトップなの？
- 男子 当たり前だろ。今回もあいつがダントツじゃねえの？
- 先生 はーはいはい静かに！ 前から言ってあったと思うが、今返したテストは、第1回目の進路調査の資料にするからな。2年生になったばかりだなんて安心してると、周りに置いていかれるから気を抜かないように。
- 口々に 「マジ -」「もう進路決めんの？」「せっかくの高校生活が...」
- 男子 (小声で)おい、どうする？ 進路調査だってさ。
- 女子 ま、わたしは別にやりたいこともないし、行きたい大学もないから、適当に自分の偏差値と合うところでも書いとくつもり。そりゃ少しでも偏差値の高いところ行きたいけどね。でも小野寺君はいいわよねー。やっぱ、青春大学？
- 小野寺隆志 うん。一応ね。
- 男子 「一応」だって。違うなあ、学年トップのやつが言うことは、おれなんか、“青春大”なんて口から出ようもんなら、周りのやつら、みんなひっくり返るだろうな。
- 3人 (笑い)
- 先生 おいそこ、静かに。授業は始まってんだぞ。では、テキスト 21 ページを開けて...
- 隆志ナレーション おれ、小野寺隆志。栄光高校2年。うちの高校は、県内でも1、2を争う進学校で、1年の時から進学指導に力を入れている。周りや親たちもそのつもりで入学させる。そんな中で、特待生として入学したおれは、この1年間、学年で成績トップを維持してきた。そのことが、おれにひそかな優越感を与えていた。
- (効果音) (授業終了のチャイム)
- 先生 ではここまで。それから、さっきも言ったようにみんな気を抜くなよ。周りはみんなライバルだと思え！
- 男子 起立。礼！ (ガヤ)
- 先生 あーっと小野寺、昼休みに職員室まで来てくれ。
- 隆志 は、はい！
- (効果音) (職員室をノックする音)

隆志 失礼します。

先生 お一、小野寺。昼休みに呼び出したりしてすまなかったな。ま、ちょっとここに座れ。

隆志 はい。何ですか？

先生 実は、他の生徒に先駆けて、進路指導をしておこうと思って。お前、志望校は？

隆志 青春大学です。

先生 お一、やっぱりそうか。当然そう言うと思ったが、一応確かめておこうと思ってさ。お前は1年の時から学年でトップだったし、このまま行ってくればストレートで入れるだろう。そうかそうか、しかし、お前みたいな生徒がうちのクラスにいてくれて、全く誇りに思うよ。いや、呼び出してすまなかったな。もう行っていいぞ。

隆志 失礼しました。

(効果音) (ドアを閉める音。教室のガヤ。)

女子 ねえねえ小野寺君。先生、何だって？

隆志 別に大したことじゃないよ。ちょっと志望大学について聞かれただけ。

男子 で、やっぱ青春大学って言ったのかよ。

隆志 う、うん。

女子 そうよねえ。当然よねえ。いいなあ。わたしも小野寺君くらい成績がよかったら、進路についてそんなに考えなくて済むのに。

男子 だよなあ。全くうらやましいよ。ちったあおれにも点数分けてほしいよ。ほーんと隆志くらい成績よかったら楽だろうになあ。

ナレーション そんな声を耳にしながらか、おれは心の中で思っていた。”こいつらに、追われる者のつらさなんか分かるもんか”と。トップの座を守るために、おれは表面は自信たっぷりのふりをしながら、陰では猛烈なガリ勉をしていた。試験成績発表の前日は、異常に神経が高ぶって、眠れないほどだった。そして、そんな自分に少しずつおれはプレッシャーを感じ始めていた。その日の午後

中谷正也 おうい隆志。待ってくれえ。たまには一緒に帰ろうぜ。

隆志 ああ久しぶり。あれ、正也、今日は部活サボり？

正也 とんでもない。まったく人聞きの悪いことを。もうすぐ県大が始まるから、その前の調整期間だよ。今日は“精神的調整の日”ってとこかな。

隆志 またカッコつけて。何が“精神的調整”だ。やっぱりサボりじゃん。

正也 いいのいいの、気にしない。(笑う)

ナレーション 彼は中学からの親友、中谷正也。陸上部のエースで、中学時代は全国で決勝まで残ったトップ中距離ランナーだった。彼との付き合いは、同じ中学で、お互い異なったジャンルのトップとしてのプライドで、大ゲンカした時からだ。結局それ以来、お互いに相手が一番であることを認めていない。だから彼は、俺が自

分はトップであることを意識しないでいられる唯一と言っていい存在だった。

隆志 最近全然、顔見なかったけど。

正也 そうだっけ？おれもお前も結構忙しかったからかな。おれ、連休は合宿だったし。

隆志 そう。それより今度の県大はどうなの？ 行けそ？

正也 分かんねえよ、やってみないことには。ま、がむしゃらにやったら勝てるとは限らないし。今度の大会は、勝負よりも思う存分走って感じ。それより、聞いたぜ秀才君。今回の実力テスト、またトップだったんだって？よくまあ続くなあ。終われる立場も結構大変だろうに。

隆志 よく言うよ。本とはそんなことちっとも思っていないくせに。

正也 バレたか。(笑う)

ナレーション おれは、何の屈託もなく笑う正也をうらやましく感じた。今まで彼に対してこう思ったことはなかったのだが…。言葉には出ないが、大会に向けて何か強い確信のようなものが感じられた。それでいておれのような強がりやハツトリがないどころか、どことなく楽しそうで、輝いているようにも見えた。中学時代の悲壮感丸出しの彼とは全く違う。どうしてだろう。

隆志 じゃ、ここで。

正也 久しぶりなのに残念だなあ。実はこれから教会の高校生の集まりに行くから一緒にどうかなって思ったんだけど。

隆志 教会って、キリスト教の？へえー、お前、教会行ってんのか。悪いけど、帰ったらすぐ予備校に行かなきゃなんないんだ。また今度。

正也 そっか。じゃあしょうがないな。そん代わり次は付き合えよ。じゃあな。

隆志 それじゃ。

隆志モノローグ 油断していたら、いつ追い抜かれるか分からない。トップに立ってたって、安心はできないんだ。けどあいつ、教会に行ってるとは。あのリラックスした態度は、それと何か関係あんのかな。

ナレーション そんな思いがしきりと頭の中をかすめた。その夜、家に着いたのは10時過ぎだった。

(効果音) (ドアの音)

隆志 ただいま。

母 お帰り。お夕飯作ってあるから、先に食べてしまいなさい。あ、そうそう、この間の実力試験の結果、もう出てるんでしょ？ どうだったの？お父さんにも伝えとかなくちゃいけないから。

隆志 うん、まあまあ。先生にも「このまま行けば、青春大学もストレートだろう」って。

母 そう、よかったわ。実はこの前、ほら、加藤君のお母さんにスーパーで会った時に、「小野寺君はいつも成績トップでいいわねえ」なんて言われてうれしかった

んだけど、あなたが何も言わないから心配になっちゃってね。でも安心したわ。その調子で頑張るよ。きっとお父さんも喜んでくれるはずよ。

隆志 ……。

モノローグ これこれ、この期待が、おれにはジワッと重いんだ。すげえプレッシャーだよ。

ナレーション おれは思わずそうつぶやいた。そんなある日のことだった。

先生 はい、静かに！ みんなおはよう。実は今日からみんなの仲間というか、ライバルが1人増えることになった。転校生の吉田真介君だ。お父さんの転勤の関係でうちの高校に編入することになった。彼はうちの転入テストに素晴らしい成績で合格したくらいだから、かなりできるやつだと思ってい。君たちも吉田に刺激されて頑張ってくれ。

それからもうひとつ連絡。来週業者テストが行われるから、そのつもりで。2年3年はテストテストの連続だから、覚悟しておけよ。

生徒 (口々に)「えー、またかよ」「ゲゲー」など。

女子 ねえ知ってる？ うちの編入テストって、超難しいんだって。今まで受かった人って、ほんと数えるほどもいないらしいよ。

男子 ほんとかよ。じゃ、もしかしたら吉田っていうやつ、すっげー頭いいじゃん。

女子 ばっかねえ。あたり前よ。東京の開明高校から来たんだから。

男子 ウッソー。マジで？ でももし本当なら納得だなあ。でもよー、それってもしかしたらうちのトップが入れ替わるってことじゃねえの？ 隆史に代わって。

女子 ひょっとすると、あるかもよ。

隆志モノローグ どんなにできるやつか知らないけど、トップはおれに決まってる。おれでなくちゃならないんだ。

ナレーション そう自分に言い聞かせたものの、今までになく大きな不安とアセリをおれは感じた。でもそれをだれに緒知られずに、ただがむしゃらに勉強するしかなかった。数日後行われたテストは、自分なりにかなり自信があった。

モノローグ これならいける。だれにも負けない。

先生 はい、それではこの前のテストを返すぞ。それから、学年順位を廊下にはっておいたから、見た者は分かると思うが、参考にすること。

(効果音) (ガヤ)

男子 おい、見たかよ、順位表。

女子 うん。でもビックリしたわ。吉田君、いきなりトップでしょう？

男子 え、そうなの？ 本当に？

女子 何、知らなかったの？ でも小野寺君、ショックでしょうね。

隆志モノローグ まさか…。そんな…。

男子 不動の小野寺もついに落ちたか。でもすげえな、吉田っていうやつ。あの小野

寺をあっさり抜くとはな。
女子 小野寺君、成績だけはトップだったのにね。
モノローグ おれが…。負けた…。
(音楽) (激しい感じ)
ナレーション 一瞬、頭の中が空白になった。顔が引きつっているのが自分でも分かった。おれは無意識のうちに学校を飛び出していた。

< 後編 >

隆志モノローグ おれが…。負けた…。
(音楽) (ショッキングな感じ)
ナレーション おれの名前は、小野寺隆志。東京から転校してきたばかりの吉田に、入学医ら、1年間守り通してきた学力トップの座を奪われてしまった。それを知った瞬間、おれの心の中で何かがブツリと切れた。それはきっと、抑えに抑えてきた精神的緊張の糸だった。学校を夢中で飛び出したおれは、気がついたら自分の部屋にカギをかけ、ベッドにうずくまっていた。
母 (外からドアをたたく音) ねえ隆志、どうしちゃったっていうの？ 学校はどうしたのよ！ (なおもドアをたたく。) ねえ隆志、答えなさい。隆志、隆志！ 隆志…。
隆志 何でもない、何でもないよ、母さん。ちょっと頭が痛くて早退してきただけ。何でもないったら。
母 それならそうと、今電話しといてあげるから、お医者さんに診てもらいなさい。分かった？ 一人で行けるわね？ この時期に風邪でもこじらして、大事な定期試験が受けられなくなったら、内申書に響くでしょ？ 大学に現役で受かるためには、気を抜いていいときはないんですからね。
モノローグ ほっとしてくれよ、母さん。あんたには結局何も分かっちゃいないんだ。あんたやおやじの期待にこたえようと、しゃにむに勉強して、周りにもいいカッコして、自分の存在感を認めさせようと、トップの座を守ってきたのに。もうおれ、どうしたらいいか分かんないよ。
ナレーション 翌朝、おれはベッドの中だった。体中が鉛のように重かった。
母 隆志！ 起きなさい。学校に遅れますよ！
隆志 母さん、おれ、学校に行きたくない。勉強もするし、予備校は行くから、学校はしばらく休む。学校の授業じゃそれほど役に立たないし。
ナレーション こうして学校を休んだおれは、まるで体に染み付いた習慣のように、机の上に教科書や問題集を広げてみた。だが、もうおれの頭には何も入らなかった。こうして2週間が過ぎた。
父 最近隆は学校に行っていないようだが、どうなっているんだ？ 別にいじめられているわけでもないだろうに。

母 そんなんじゃないですよ。隆志は、学校の授業じゃ物足りないんですよ、きっと。この前の試験もトップだったって言ってましたから、心配ないですよ。

父 ならいいんだ。もともと学校の授業にはわたしもそれほど期待していなかったしな。それなら家庭教師ももっと増やそう。明日にでも派遣会社に連絡とっておいてくれ。

母 はい、分かりました。わたしもそのつもりでいましたから。

(効果音) (ドアの開く音)

父 おお隆志。ちょうどよいところだ。今、母さんと話し合っていたんだ。お父さんも、お前の成績さえよければ何も言わんから、気を抜かずに頑張ってくれ。わたしも母さんもお前には期待しているんだからな。

隆志 うん。

ナレーション こうしておれば、実力試験や模擬試験のときだけ学校に行くようになっていた。だが、膨らみきった風船に小さな穴が開くと急速に縮んでしまうように、一度トップの座から滑り落ちると、あとはズルズルとおれの成績は下がる一方だった。そんなある日、担任の林先生が訪ねてきた。

(効果音) (玄関のチャイム)

林先生 栄光高校2年C組担任の、林と申します。

母 あ、先生。どうぞお入りください。

ナレーション 母は、事の次第を先生に話したようだった。

先生 では病気というわけではないんですね？

母 はい。何ですか、学校の授業では物足りないからと申しまして。

先生 は？

母 うちの隆志は、そういう面ではナイーブなものですから、3年を前に、成績が下がるようなことがあっては、と申しまして。

先生 そうですか。しかし...

母 出席日数が足りてる間は、自宅で勉強させることにしました。でもご安心ください。家庭教師も増やしましたので、学校の授業に出なくても大丈夫だろうと主人も申しておりましたので。

先生 しかし、その成績のほうが最近では全然で、このままですと、2、3ランク下の大学でもどうかというところですよ。ちょっと前までは不動のトップだったんですがねえ。

母 え？ あの... そうですか...

先生 それでは、もう一度よく隆志君と話し合ってください。それでは、わたしはこれで。

(効果音) (ドアの閉まる音)

ナレーション 先生が帰った後、母はなぜかおれに何も言わなかった。

その日の夕方、もう一人の来訪者があったことを後で知った。

(効果音)

(玄関のチャイム)

正也

あ、すみません。隆志います？

母

あ、中谷君。ごめんなさいね。たった今予備校に出かけたところなの。

正也

あ、そうですか。では、すみませんがこれ、わたしといてもらえませんか？

母

あ、参考書かなんかですか？

正也

いいえ、聖書です。じゃお願いします。

ナレーション

帰ると、何となくいつもと雰囲気が違っていた。

隆志

ただいま。

母

隆志。ちょっと待ちなさい。お父さんが少し話したいことがあるそうよ。

隆志

でも明日試験があるから。

父

隆志！ちょっとここに来て座りなさい。

隆志

でも…。

父

いいから。隆志、父さんや母さんに黙っていることないか？

隆志

…。

母

今日、昼過ぎに、林先生がわざわざ見えられたので、隆志が学校お休みしている事情なんかをお話したの。そうしたら先生から、あなたの最近の成績のことや大学入試のことを言われたわ。

隆志

…。

父

隆志、黙ってないで、何とか言ったらどうなんだ。

母

そうよ。父さんと母さんに説明してちょうだい。

父

隆志、父さんと母さんは、お前が成績さえよければと思って、学校に行かないでうちで勉強することにも目をつぶっているんだぞ。それを、ずっとトップだった成績だって、落ちてきているそうじゃないか。先生にもかなりランクの低い大学を勧められたそうだし。しかもそのことを黙っていて、母さんには「試験はトップだった」なんてうそまでついて。いったいお前は何を考えているんだ？ 全く、前はそんな子じゃなかったのに。

隆志

父さん。おれは…。

父

もういい！言い訳など聞きたくない。とにかく、今度の試験でトップを取れないようなら、あんな学校にいる必要はない。わたしはトップ以外は認めんから。分かったな？

(効果音)

(激しくドアの閉まる音)

ナレーション

ショックだった。父も母も担任も、だれもが敵に見えた。そして自分自身にも腹が立った。

モノローグ

畜生！ みんなおれを分かってくれない。トップでないとおれの存在を認めてくれないんだ。

(効果音) (部屋の中で物を投げつける音)

隆志 畜生！ 畜生！（泣きながら）

ナレーション おれは、自分の部屋にあったものを力に任せて手当たり次第に投げつけた。

モノローグ ん？何だ、これは？

ナレーション メチャメチャになった部屋の中に、おれは見慣れない紙包みを見つけた。それは、正也が届けてくれた聖書だった。中には正也の手紙が入っていた。

隆志 (読む)「隆志へ。しばらく会ってないし、会って話ができそうもないから、手紙を書くことにした。書くのが死ぬほど嫌いなおれが書いたんだ。読んでくれ。(正也の声にオーバーラップ)お前が吉田にトップの座を奪われて、学校飛び出して、そして今どんな気持ちでいるか、おれなりに分かるつもりだ。お前の出席日数が足りなくなっても、留年してやり直せばいいし、退学しても大検あるから、多少回り道しても構わないとおれは思う。だから、お前を学校に戻そうなんて思っていない。おれも実は中3の最後の大会の前の日、怖くて家から逃げ出したんだ。多分、今のお前と同じようにトップであり続けなければならないプレッシャーが、もう限界に来ていたんだな。」

(音楽) (不安そうな感じ)

正也モノローグ ここで負けたら…。トップになれなかったら、周りからどんな目で見られるだろう。勝たなきゃみんなおれを認めてはくれないんだ。

正也 そう思ったら、怖くて怖くて仕方なかった。そんな時、駅前でチラシのようなものを渡された。

正也モノローグ 何だ？ “あなたは愛されています。疲れた心に神の愛を。”ふん、神の愛か。おれのことなんか、神様が構ってくれるのかな。

正也 でもおれは、何か心に引っかかって、チラシに書いてあった場所に行ってみたんだ。そこは教会だった。苦しいときの神頼みなんて死ぬほど嫌だったのに、その時は一も二もなくドアを開けていた。

井上牧師 あ、いらっしゃい。牧師の井上です。何かお困りですか？

正也 その牧師さんの何とも言えない優しい声を聞いた時に、おれの心は決まった。変に自尊心が強いところのあるおれは、人に弱いところを見せたくないって思っていたのに、その時の恐れ、不安、孤独な気持ちのすべてをその牧師さんに話していた。

井上牧師 中谷君は、トップであり続けることが、自分の存在を他人にも自分自身にも認めさせる唯一の道になってしまったんだね。作られた自分、偽者の自分を守り続けるってつらいだろう？ 競技のトレーニングより何倍も苦しいよね。中谷君、ありのまんまでいいんだよ。最善を尽くしてピリならそれだっていい。イエス様は本当の君を丸ごと受け入れてくださるんだ。どうだい、この方のことをもっと深く知ってみたいか？

正也 そういって牧師さんがプレゼントしてくれたのが、同封した新約聖書だ。お前も読んでみないか。小野寺、おれはトップのお前は認めない。それは本当のお前じゃないからだ。だがおれは、巡り会えた一人の人間として、大事な友として、今、本当の自分であろうとして苦しんでいるお前を、だれよりも認めているつもりだ。神の一人子イエス様が、おれのどうしようもない傲慢^{ごうまん}の罪を身代わりに負って死ぬほどに愛してくださり、このまんまで受け入れてくださったことを信じた時、おれは本当に楽になった。小野寺、自分が自分であるって何よりも大事じゃないかな。おれの経験では、それはイエス・キリストのうちにある。お前のために祈ってるよ。

隆志ナレーション おれはその聖書を手に取り、めくってみた。いろいろなところに赤線が引いてあったが、あるところにしおりが挟んであった。

聖書朗読(女声) 新改訳 マタイの福音書 11章

28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

隆志モノローグ “あなたを休ませて上げる”か…。中谷、助けてくれよ。おれも教会に連れてってくれ。

ナレーション そうつぶやきながら、おれは、強豪相手にビリになっても変わらない、中谷のさわやかな笑顔を思い浮かべていた。

< 完 >